



Title	テバフ式土器の発展の問題について
Author(s)	デリューギン, V. A.
Relation	オホーツク文化形成期の諸問題 = Problems on the formative stage of the Okhotsk culture
Citation	北海道大学総合博物館研究報告, 1, 61-67
Issue Date	2003-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38401
Type	departmental bulletin paper
File Information	no1_p61-67.pdf



テバフ式土器の発展の問題について

デリユーギン V. A.

Pottery of the Tebakh Type

DERYUGIN Valery

Northwest from the Okhotsk culture area, on the Amur estuary, are located sites of the Tebakh culture. Several points on typology and chronology of Tebakh pottery must be considered.

In this article the author continues to develop his own point of view on this problem. In particular, he disagrees with the Usuki's idea dividing Tebakh culture into four chronological stages. The way not conclude that every type of Tebakh pottery reflects appointed temporal limits, which change in chronological succession. Tebakh pottery correlates only with two periods of Okhotsk culture: Enoura and Minami-Kaiduka. Pottery of the Tebakh type, whose morphology changed very fast, developed only during the Enoura period.

はじめに

オホーツク文化の遺跡は、サハリンから千島列島北部までオホーツク海南岸に沿って広がっていた。このオホーツク文化の分布域の北西には、同時にテバフ文化が存在していた。テバフという文化は、海獣狩猟民と遊牧民の世界の接触地帯に拡がっていた。

最近、筆者はテバフ文化の土器をいくつかの類型に細分した（Дерюгин 1998, デリユーギン 1999）。これに対するコメントの中で、臼杵氏は筆者の編年案に対し否定的な見解を示している（臼杵 1999）。この臼杵編年に対しては、他の日本人研究者からの同意も見られるようである（熊本 2000, 熊本他 2002）。それ故今回は、臼杵編年に対して詳細に批判を加えると共に、改めて筆者の見解を述べることにしたい。

1. 問題内容

まず、テバフ文化の調査・研究史について簡単に紹介したいと思う。オクラードニコフ博士は、1935年のアムール河口部の調査で、独自性のある特徴的な土器を識別した（Окладников 1980）。1981年、新石器時代を主とするリーチ河河口部の遺跡で4基の竪穴住居址が発掘された。この遺跡の上位の層中で、オホーツク文化のものと類似する土器が確認された。放射性炭素測定の数値によって、上層に含まれる炭化物の年代を紀元前2000年紀末-1000年紀前半と推定した（Окладников, Медведев 1983）。

コピチコ氏は、一般調査の成果に基づいて、「テバフ文化」という名称を初めて使用した（Копытченко 1989）。彼は、この文化の遺跡から出土したさまざまな遺物の年代について、紀元前2・1世紀-後4・5世紀と推定した。

1990-1991年、ローサン女史は、スターラヤ・カコルマ遺跡で発掘を行い、上層で出土した丸底のテバフ式土器の年代について紀元前1000年紀後半と推定した（Лосан 1991・1994）。

テバフ遺跡では、オクラードニコフが小規模な

発掘を行ったが、調査結果は発表されていない。この調査で出土した土器の一部は、臼杵 勲氏が論文の中で紹介したことがある（臼杵 1990）。氏は、文様と手法（口縁部）の差異から、「テバフ式土器」を二つのグループに分けた。年代は紀元後 8-11 世紀で、大陸地域にもサハリンのオホーツク式土器の分布が及んでいたとした。その後、得られた最新のデータに基づき、従来の「テバフ式土器」の分類に若干の変更の必要性を説いている（臼杵 1996）。

2001 年、ハバロフスク郷土史博物館と東京大学は、共同調査を行い、ニコラエフスク・ナ・アムール市でテバフ文化の竪穴住居址を初めて発掘した（熊木他 2002）。

現在、テバフ文化の土器編年・発展については、主な意見が 3 つある。第 1 は、コプィチコ編年に則る立場である。テバフ文化の研究に直接関わりをもたないロシア人研究者の大部分は、コプィチコ編年を受容しており（Древности Бурей 2000 : 105）、一方、関わりを持つロシア人研究者も、コプィチコ編年を積極的に採用して自身の研究を進めている（Лебединцев 1999 : 44・49-50）。

第 2 は筆者の見解である。筆者は伊東氏のオホ

ーツク文化の土器編年（伊東 1942）と対比して、テバフ文化の土器を a 類 - f 類までの 6 類に細分した（デリューギン 1999）。これらのうち a - c 類のみを、「テバフ式土器」と呼ぶことにする。これらの類型は、製作手法と器形から大きく三つに分割すべきである。共通する要素は、口縁直下の粘土紐、頸部がゆるやかにくびれる鉢形の器形、頸部のスタンプ文、胴部の叩き目菱形文である。かたや、d - f 類を「オホーツク式系土器」と呼ぶことにする。テバフ式土器は、d 類（江の浦 B 式）・e 類（江の浦 A 式）とほぼ同時期に存在していた。テバフ式土器の変化は、丸底から平底へと変化した。f 類（南貝塚式）はアムール女真文化（パクロフカ文化）とほぼ同時であった。オホーツク式系土器は、靺鞨文化とポリツェ文化の土器と関係する可能性がある。しかしながら、テバフ式土器の起源については内陸の文化に関係すると考えている。

2. 臼杵編年について

第 3 は臼杵氏の意見である。既述のように、氏は筆者の編年に対して批判的なコメントを出して

臼杵編年

時期	オホーツク式系 (サハリンとほぼ共通)	テバフ式系 (方格型押文を持つ在地のもの)
1期	江の浦B式	—
2期	江の浦A式	テバフc 類
3期	南貝塚式	テバフb 類
4期	—	テバフa 類

デリューギン編年

時期	オホーツク式系 (サハリンとほぼ共通)	テバフ式系 (方格型押文を持つ在地のもの)
江の浦期	江の浦B式	テバフa 類
	江の浦A式	テバフb 類
		テバフc 類
南貝塚期	南貝塚式	—

臼杵編年案とデリューギン編年案の比較

いる（臼杵 1999）。以下では氏の挙げた問題点に対して詳細に反論してゆくことにしたい。

臼杵氏の言葉を借りれば、筆者の土器分類は、氏の示す土器分類（臼杵 1990）と同じである。特に、筆者の a-c 類が氏の II 群、e 類が I 群にあたるという。その上で臼杵氏は、筆者のテバフ文化土器編年を逆転させ、テバフ文化の土器を 4 期に分けた。第 1 期（江の浦 B 式）には d 類、第 2 期（江の浦 A 式）には c 類・e 類、第 3 期（南貝塚式）には b 類・f 類、第 4 期には a 類が相当するという。筆者は、氏のオホーツク式系土器の編年に対して同じ意見をもつ。しかし、それは、オホーツク文化の一般的な分類であるにすぎず、そこに何ら新しい見解を見ることはできない。

論争点はむしろ「テバフ式」編年そのものにある。臼杵氏の最新の編年を見てみよう。

氏は、第 1 期に対しては、スターラヤ・カコルマ遺跡の場合、層位的に a 類・b 類は、d 類より新しいとしている（臼杵 1999: 32）。これには筆者も同意する。しかし、江の浦式土器の発生時期については議論の余地がある。

臼杵編年の第 4 期について一つだけ言えることは、この時期を設定する根拠はないということである。テバフ式 a 類が、南貝塚期の後の時期に他の地域から移動した場合、そういう設定はできるだろう。しかし臼杵氏は、テバフ式 a 類の発展はアムール河口部における以前の土器に関係を認めているのである。

第 3 期について氏の意見は次のようなものである。「主要遺跡」で f 類（南貝塚式土器）がない以上、テバフ文化の広がった地域全体で f 類が一般的であったとは考えにくい。そして、パラヴィンカやイジュート島の類例はサハリンから持ち込まれた可能性もあるという。搬入ルートについては筆者もそのような可能性はあると考える。しかし、氏の言う「主要遺跡」における調査面積は小さく、テバフ文化の土器自体も圧倒的に少ないので、これらの遺跡の成果に基づいて、テバフ文化の広がった地域全体について語るのは危険であろう。

また、サハリンからの搬入についても、北サハリンと南サハリンでは野外調査の件数に格段の差がある。北サハリンでは、南貝塚式土器を伴う遺跡については、ラングリ遺跡（平川 1995）とハンツーザ遺跡（山浦 1985）しか明らかでない。

しかも、ハンツーザ遺跡の位置は現在特定できない。それに比べて、サハリン南部では考古学的なデータが圧倒的に多い。この状況は北海道南部の擦文文化と北海道北東部のオホーツク文化を比較する際の問題点と同じである。そのため、アムール河口部の f 類と南サハリンにおける南貝塚式土器の横の関係について同じ調査レベルで考えること自体、賛同することができない。

では、f 類がサハリンからアムール河口部に広がったとする臼杵氏の主張を否定するならば、果たしてどのような土器が南貝塚期にはあったのか。筆者は、この時期、アムール河口部にはパクローフカ文化（アムール女真文化）の遺物を伴う遺跡があったと考える。この遺跡の位置は、例えばアストロハーノフカ遺跡やマーゴ遺跡やテバフ遺跡など、市場や軍隊キャンプに適した所にある。これらの場所は遠方まで眺望できるような拠点的な位置にある。それに対して、f 類（南貝塚式土器）を伴う遺跡は、生業、特に漁撈に適した自然環境内にある。このことは f 類を用いた集団が在地の生活伝統を継承して生活していたことを示し、e 類（江の浦 A 式）が用いられた頃の生業が続いていたことを意味する。そのため、f 類は e 類と同じく、アムール河口部で在地的に普及していたと考えられる。

臼杵氏が第 3 期としたテバフ式土器については以下の問題点がある。現状ではテバフ式土器と南貝塚式土器が共に出土する遺跡はまだ発見されていない。スターラヤ・カコルマ遺跡では、テバフ式土器は、南貝塚式土器と同時期のパクローフカ文化の土器を伴う表土層と初期鉄器時代の文化層の間から出土した。それ故、b 類と f 類は同時に存在しないし、従って、氏の第 3 期にテバフ式土器を含めることはできない。

さて、型式学的にも、テバフ式 a 類・b 類と南貝塚式土器の間に類似点は見られない。共通点は、スタンプ文様を両方に利用することのみである。しかし、南貝塚式土器の場合は、数条の平行沈線文間にハの字形の刻文、斜行する刻文が見られる。ロール・スタンプ文・押引きスタンプ文より押し型のスタンプ文様は少ない。

経済の流通の中に土器製作が組み込まれている文化が、家内レベルの土器製作を持つ地域へ波及する時、家族単位の生業は崩れることになるだろう。例えば、遼に開拓された沿海地方では、トロ

イツコエ土器群が無くなった。しかし、臼杵編年では、アムール河口部で、パクロフカ文化の影響によるテバフ式土器の衰退は認められない。

一方、時間的に併行する同地域のオホーツク式系土器には、経済の流通と土器製作が強く関係するパクロフカ文化からの影響（f 類）が現れている（デリュージン 1999：26）。それ故、テバフ式土器のみがそうした影響を免れたことは考え難い。しかも、テバフ式 a 類・b 類を第 3 期に入れた場合、300 年以上も他からの影響を受けずに単系的に変化することになり、そうしたことはナンセンスと言うべきであろう。

第 2 期にテバフ式 c 類を入れることについては、臼杵氏と筆者の意見は同じである。2001 年度のニコラエフスク空港遺跡の調査によって、c 類は b 類と同時期であったが、スターラヤ・カコルマ遺跡では、b 類と a 類が同じ文化層で出土した。従って、テバフ式 a 類・b 類・c 類は、短期的に存在し、特に、第 2 期（江の浦 A 式）で現地の土器に若干の影響をあたえて、e 類に同化されたと考えられる。

しかし、第 2 期の枠内ではもう一つ議論が残っている。テバフ式土器では、平底と丸底の新旧関係はどうであったのか。河口ポリツェ文化の平底の土器から発生を仮定すれば、ポリツェ土器からの変遷において、なぜ、一つのタイプ（丸底テバフ式）が継承されたのか説明できない。特別な器形への変化は儀式での利用などへの用途の変化として理解できるが、丸底土器の場合、そのような用途の変化は調査で確認されていない。一方、ポリツェ系土器やテバフ式土器の器表面の菱形文は、若干異なる。前者の場合は、土器文様の意味があるが、後者の菱形文は成形技術に由来するものである。

アムール河口部以外の地域にも土器製作の同じ過程が見られる。オホーツク海北西沿岸における菱形文を持つ丸底土器は、ボグチャーン期が終わるまでよく使われていたが、その後、アタルガン期（10-12 世紀）に、このタイプは非常に少なくなる（Васильевский 1971：134-135）。

サハリンの南貝塚期にも丸底土器は確認できない。最後の丸底土器は、ポロナイ低地における在地的な江の浦式土器の中にある。そこには、丸底も平底もあるが、その地域の遺跡を調査したフェドルチュック氏は、丸底が平底より古いと指摘し

た（Федорчук 1998：149-150）。サハリン中部とアムール河口部では、最後の丸底の土器がほぼ同時期に消えた。

バイカル湖周辺の文化の影響もアムールランドには明らかにあった。紀元前 2000 年紀末には、丸底土器がこの地に拡まった（Деревянко 1973：113・115）。1961 年、アムール中流域におけるステパーニハ谷遺跡では、初期鉄器時代の集落近くで、プリバイカル地方青銅器時代のタイガ地帯型の特徴がある丸底土器をもつテント状住居址が発掘された。1962 年、コンドン村周辺におけるサルゴーリ遺跡では、バイカル湖周辺における紀元前 2000 年紀末に属するグラスコーヴォ文化の土器に類似する丸底土器が発見された。大陸における社会文化過程と関係がある土器の一般的な発展についても考えなければならないと思う。

3. 再度テバフ文化土器編年について

オホーツク文化と大陸側における社会文化の変容過程には、段階的發展に規則性が見られる。十和田期には靺鞨文化のナイフェリト土器群が拡がり、江の浦期には渤海が発生、靺鞨文化のトロイツコエ土器群が拡がり、南貝塚期にはパクロフカ文化あるいはアムール女真文化が発展する。もちろん、列島地域より大陸地域の社会文化の展開過程はより早く現れた。

臼杵編年による 4 期での細分は不自然なものである。アムール河口部におけるテバフ文化は、最後の江の浦期と南貝塚期に存在していた。南貝塚期の場合は、一つだけ問題が残っている。f 類はサハリンから拡がったかアムール河口部で発生したのか。現在、筆者は、以前の意見を変えていない。f 類は、パクロフカ文化のロクロ製の土器と関係する可能性が高い。

江の浦期に対して 2 期の細分は様々な問題がある。d 類（江の浦 B 式）は時期的な区分が明快ではない。筆者は、天野氏の意見（天野 1978：78）に同意する。d 類は e 類よりやや古いと考えられるが、両者はある時期に同時に存在していたのかもしれない。

江の浦 B 式（d 類）・江の浦 A 式（e 類）土器の発生には、4-5 世紀に属する靺鞨文化のナイフェリト土器群の強い影響があったとされている（加

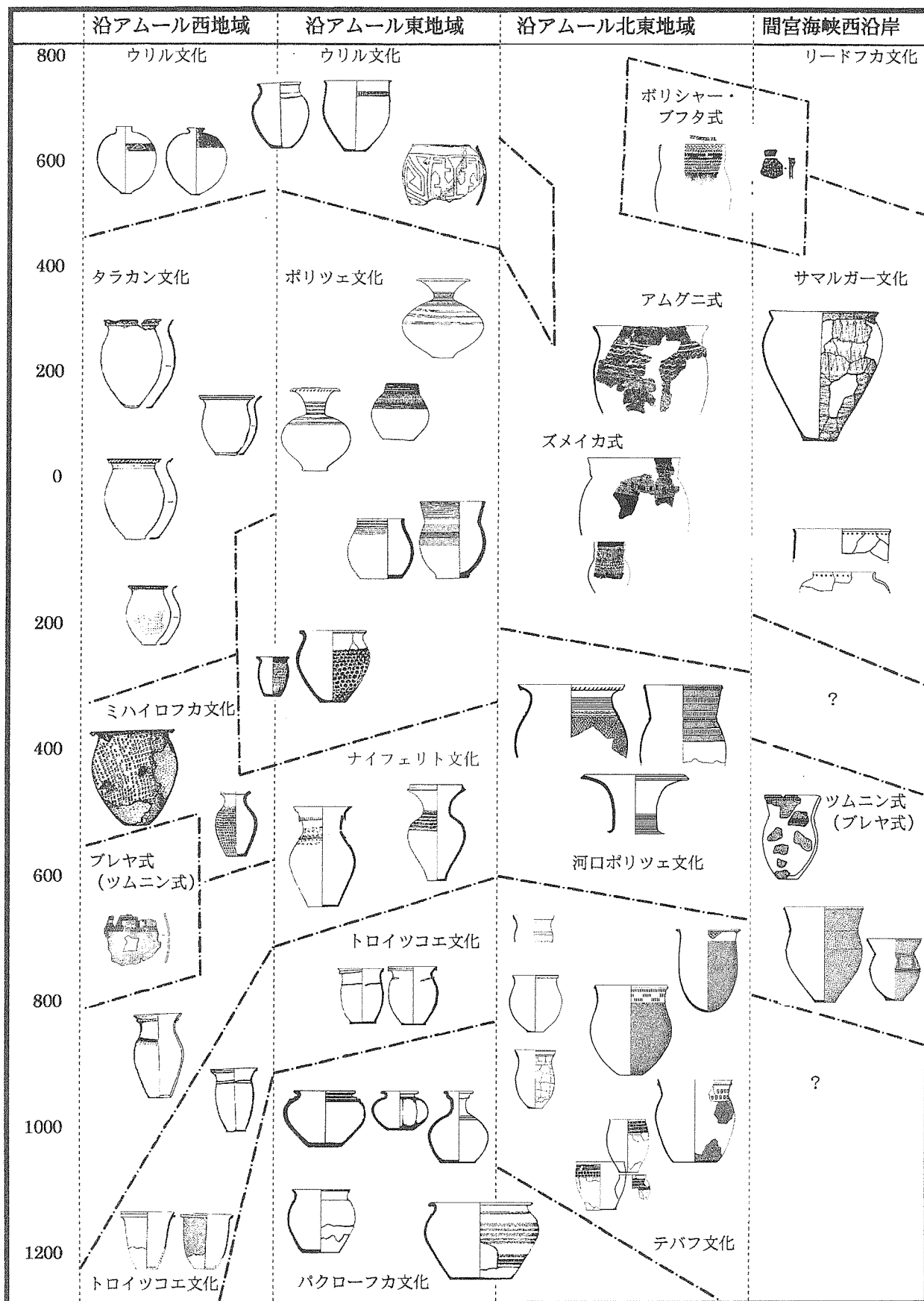


Fig.1 沿アムール地域の編年試案におけるテバフ文化の位置

藤 1975, 白杵 1990・1994, 菊池 1995: 1-69)。ロシア側の何人かの研究者もそういう理論を支持した(Дьякова 1984: 132, Федорчук 1995: 29-48)。ヂャーコヴァは、靺鞨文化の東限は、サハリン・北海道にあると述べた(Дьякова 1993: 12)。筆者も、靺鞨文化の影響に関するその理解を支持している。しかし、アムール河口部のポリツェ文化の要素も見られる。

テバフ式土器は、アムール河口部で孤立している訳ではない。類似する土器は、オホーツク海北岸における古コリャーク文化の遺跡の資料にもみられる。しかし、テバフ式土器と異なって、古コリャーク土器にはスタンプ文は無い。また、テバフ式土器・古コリャーク文化の土器に類似する土器は、ゼーヤ・ブレヤ河流域におけるミハイロフカ文化の土器にも見ることが出来る。

筆者は、テバフ式土器のスタンプ文の起源について2つの可能性があることを示した。一つは、河口部ポリツェ文化晩期にはあった櫛歯文・X字形のスタンプ文の土器との関係である。もう一つは、テバフ式土器のスタンプ文が発生した地域としてヤクート地方を想定することである。

スタンプ文様は、テバフ式土器の特徴である。類似するスタンプ文様は、シベリアの原住民の間でよく用いられている。例えば、コリャーク人はこのような文様で衣服(Иохельсон 1997: 123・163)・白樺の皮製容器を、ヌガナサン人は、トナカイ橇(Попов 1948: 108-109)に乗る時に使う膝掛けを飾った。ヤクート地方では、近代に作られたスタンプ文様を持つ土器が発見された(Алексеев 1996: 54-55)。

スタンプ文様を持つ土器は渤海・女真時代にもあったが、大体、ロール技法が用いられていた。押型によるスタンプ文様は非常に少なく、スタンプ文様全体の中でも十分な量ではない。ヂャーコヴァによって、アムール下流域に住んでいる現住民族にはスタンプ文様の使用は見られないと指摘されている(Дьякова 1993)。しかし、ナナイ人やエヴェンキ人にはスタンプ文様の使用があった¹⁾。

結語

全ての議論は、伊東信雄によって作られた編年が骨格となっている(伊東 1942)。彼の編年はオ

ホーツク海沿岸の広い地域に利用できると考えられる。この編年は、土器の類型や、文化と地域のヴァリエーションを理解するものでなく、環オホーツク海における文化の段階的發展を対象としたものである。

テバフ文化の資料は、いわゆるオホーツク文化の江の浦・南貝塚期以外に類例がない。この時期以前には、サハリン・北海道北部とは別に、アムール河口部で独自の社会文化の展開過程があった。

ワシリェフスキー氏の意見に従えば(Василевски 1999)、テバフ文化はオホーツク文化のローカルな文化である。筆者もこれに同意する。それ故、オホーツク文化が大陸へ拡大するという日本人研究者の見解を認めることはできない。なぜならば、テバフ文化は上述のように別の場所に起源を持つと考えられるのであり、その上、オホーツク文化が大陸へ拡大したとする社会・生業・政治上の根拠も認められないからである。

テバフ文化は、環オホーツク海の文化と靺鞨文化の中間に存在する世界であった。一方、タイガ地帯の遊動民の影響もよく認められる。

もちろん、現在もテバフ文化について議論すべき問題は多く残っている。だが、テバフ文化の諸問題についての議論は、これまでのところ、白杵氏と筆者の間に限られている。それ故、他の研究者の参加をも期待したい。

今回、福田正宏、枡本 哲、北森梨恵子の各氏にはご協力をいただいた。記して感謝の意としたい。

註

- 1) デネコ A.・メーリニコヴァ T.・デリューギン V.「アムール河における先住民のスタンプ文の技術」(印刷中)

引用文献

- 天野哲也 1978「オホーツク文化の展開と地域差」『北方文化研究』第12号: 75-92
- 伊東信雄 1942「樺太先史時代土器編年試論」『喜田貞吉博士追悼記念国史論集』東北帝国大学国史学会編、大東書館: 19-44
- 白杵 勲 1990「アムール河下流テバフ遺跡出土土器について」『古代文化』42-10: 48-59
- 白杵 勲 1994「靺鞨文化の年代と地域性」『日本

- と世界の考古学』岩崎卓也先生退官記念論文集, 雄山閣: 342-350
- 臼杵 勲 1996 「近年のロシア極東の考古学調査・研究」『古代文化』48-5: 3-11
- 臼杵 勲 1999 「アムール河口部のテバフ文化土器」『物質文化』66: 31-34
- 加藤晋平 1975 「間宮海峡をこえて」『えとのす』2: 40-52
- 菊池俊彦 1995 『北東アジア古代文化の研究』北海道大学図書刊行会, 札幌
- 熊木俊朗 2000 「近年のオホーツク文化研究展望—北海道・サハリン・アムール河口部の土器研究中心に—」『祭祀考古』第16・17号併号: 37-42
- 熊木俊朗・ワレリー=デリュエギン・佐藤宏之・福田正宏・高橋 健・臼杵 勲・角達之助・塚本浩司・佐藤 昌 2002 「ロシア・アムール河口部のオホーツク文化—ニコラエフスク空港1遺跡の発掘調査成果—」『日本考古学協会第68回総会』研究発表要旨東京都立大学(2002年5月25日・26日), 日本考古学協会: 163-166
- デリュエギン V. A. 1999 「アムール河口部におけるオホーツク文化併行土器の分類・編年」『物質文化』66: 20-30
- 平川善祥 1995 「サハリン・オホーツク文化末期の様相」『北に歴史・文化交流研究事業』—研究報告, 北海道開拓記念館: 135-156
- 山浦 清 1985 「樺太先史土器管見(1)」『考古学雑誌』71-1: 44-68
- Алексеев А.Н. 1996 *Древняя Якутия: железный век и эпоха раннего средневековья*. Изд. ИАиЭ СОРАН. Новосибирск.
- Васи́левский А.А. 1999 Охотская проблема и ее современное прочтение в России и Японии. *Интеграция археологических и этнографических исследований*. с. 129-133. Москва-Омск.
- Васи́левский Р.С. 1971 *Происхождение и древняя культура коряков*. Наука, Новосибирск.
- Деревянко А.П. 1973 *Ранний железный век Приамурья*. Наука, Новосибирск.
- Дерюгин В.А. 1998 Керамика “тэбахского типа”. *Россия и АТР*. №2. с.71-80.
- Древности Бурей 2000 Изд. ИИА и ЭСОРАН. Новосибирск.
- Дьякова О.В. 1984 *Раннесредневековая керамика Дальнего Востока СССР как исторический источник IV – X вв.* – М.: Наука.
- Дьякова О.В. 1993 *Происхождение, формирование и развитие средневековых культур Дальнего Востока*. Дальнаука, Владивосток.
- Иохельсон В.И. 1997 *Коряки. Материальная культура и социальная организация*. – СПб.
- Копытько В.Н. 1989 Тебаховская культура (некоторые результаты исследований). *Проблемы изучения памятников каменного века и палеометалла Дальнего Востока и Сибири*. с. 24-28. Владивосток.
- Лебединцев А.И. 1999 Становление и развитие Приморского хозяйства в Северном Приохотье и Камчатке. *История, археология и этнография Северо-Востока России*. с. 42-69. Магадан.
- Лосан Е.М. 1991 Исследования на поселении Старая Какорма в Николаевском районе Хабаровского края. *Краеведческий бюллетень*. №2. с. 73-83.
- Лосан Е.М. 1994 Об археологических раскопках на поселении Старая Какорма. *Съезд сведущих людей Дальнего Востока*. с. 15-17. Хабаровск.
- Окладников А.П. 1980 О работах археологического отряда Амурской комплексной экспедиции в низовьях Амура летом 1935г. *Источники по археологии Северной Азии. 1935-1976*. с. 3-52. Наука, Новосибирск.
- Окладников А.П., Медведев В.Е. 1983 Исследования близ г. Николаевск-на-Амуре. *АО 1981 года*. М.. с. 223-224.
- Попов А.А. 1948 *Нганасаны*. Наука, М. Л.
- Федорчук В. Д. 1995 Археологические исследования Поронайского историко-этнографического музея в 1993-1994гг. *Вестник Сахалинского музея*. №2, pp.29-48.
- Федорчук В.Д. 1998 Керамика поселений с раковинными кучами северного побережья залива Терпения. *Вестник Сахалинского музея*. №5. с. 143-162.